

第7回考古天文学会議(2023年12月24日)

南西諸島の暮らしと星—星名伝承の研究黎明期と現在・多良間のニーリの星名同定

北尾浩一

1. はじめに—問題の所在

星は、人びとの暮らしにとって、どのような意味を持ってきたのであろうか。人びとは、どの程度、星を見てきたのであろうか。人びとの生活のなかで、星は、山や海と同様、日常的な景観であり、生活及び生業と密着した自然環境のひとつであったと考えることはできないのであろうか。

星は、時間軸、空間軸のなかで決められた動きをする。

まず、時間軸を考えると、一日単位の日の出からの昼の時間、日の入りからの夜の時間がある。暮らしを維持するための生業は、昼も夜も行なわれた。星はまさに一日単位の時間軸では時計であった。この時間軸を一年単位で考えたとき、星は、播種の季節、漁の季節等、生業における時間軸の位置を決定するカレンダーであった。

時間軸のなかで星の動きは連続したものであった。古代から連続して途切れることなく繰り返され、今日があり、そして未来がある。そのなかで闇と明かりは、あるときは信仰を、あるときは神話、昔話を形成した。そして、語り、唄った。

次に空間軸を考える。人間は、古代から連続して、空間軸を移動していった。人間は古代において船を空間軸移動の手段として持つことができた。その空間軸の移動は星空の下で行なわれた。空間軸の移動とともに、星の見え方が変わっていった。

本稿では、南西諸島、即ち、九州と台湾の間に約1200キロにわたり連なる島を対象にして、その空間軸のなかで生きてきた人びとと星のかかわりを論じていく。

具体的には、次のような切り口から研究を進める。

- (1) 人びとが、日々の暮らしのなかで形成した星の名前(星名)。
- (2) 人びとが、日々の暮らしのなかで形成した星の歌(ユンタ、ニーリ、アーク等)
- (3) 人びとの祈りのなかでの星。(例 アガリミチブシへの祈り。シニグのなかでの星)
- (4) 人びとの年中行事のなかでの星。(例 七夕、綱引き等)
- (5) 人びとの建造物のなかでの星。(例 石垣島、竹富島の星見石。宮古島の星見石を疑う立石。久米島の太陽石等)
- (6) 星見様(久米島、多良間島、波照間島)

本稿では、上記(1)～(3)の研究の黎明期におけるニコライ・A・ネフスキーとシャルル・アグノエルの調査研究を押さえた上で、いままでに実施した現地調査、アンケート調査をもとに論じていく。

最初に、研究の対象とする南西諸島の種子島、屋久島から波照間島、与那国島までの空間軸の概要を図示するとともに、上記2名の研究者についての概要を記す。



図 南西諸島

◎ニコライ・A・ネフスキー

1892年(明治25年)、モスクワの北方約250キロにあるヴォルガ河岸のヤロスラヴリに生まれる。1919年(大正8年)～小樽高等商業学校(現 小樽商科大学)のロシア語講師のとき、宮古語の研究に取り組んだ。宮古語を稲村賢敷より学び、1922年(大正11年)、稲村賢敷と宮古島を調査。(写真右、宮古島のネフスキー記念碑)

◎シャルル・アグノエル

1896年(明治29年)、フランスに生まれる。1930年(昭和5年)3月4日～4月12日、首里市、那覇市、糸満町等にて調査を実施。(金城善2014)



2. 南西諸島における星名伝承形成の地理的条件と特徴

(1) 見上げなくても目の前に北極星(ニヌファブシ)を見ることができる

日本は、南北に長い。もともと北の北海道宗谷岬は、北緯 45 度 31 分 22 秒、有人島でもっとも南の沖縄県波照間島では北緯 24 度 2 分 44 秒と、20 度以上ちがう。従って、北極星(こぐま座 α 星)の高度は 20 度以上も異なり、最北端の高度は、最南端の倍近くになる。

北海道、北緯45度ということは、北極星の高さも約45度。したがって、北極星を見るためには首を曲げて見上げなければならない。北大(当時)の福澄孝博氏より北大と鹿児島大の寮歌にその違いが唄われていると教えていただいた。北大の寮歌に、「おごそかに 北極星を仰ぐ哉」とある。仰がなければならない。北海道大学(札幌市)の緯度は北緯約43度、北極星を見るためには仰ぐ必要がある。一方、旧制第七高等学校(現 鹿児島大学)の寮歌には、「いざや歌わんかな北辰斜め」と歌われている。北辰は、北極星のこと。鹿児島では北海道のように仰がなくても斜めに見える」と歌う。鹿児島大学(鹿児島市)の緯度は北緯約31.6度、まさに仰がなくても斜めに見える。

沖縄・奄美の星を考えるにあたって、最も北の奄美大島の笠利崎灯台は北緯28度31分46秒、最も南の波照間島の緯度は北緯24度2分44秒で、緯度の差は約4.5度ある。岩手県二戸駅の緯度北緯40度15分36秒と東京駅の緯度北緯35度40分52秒とほぼ同じである。

したがって、北極星の高さは、奄美大島、喜界島では 30 度に迫るが、沖縄本島以南では 25 度前後、首を曲げて見上げなくてもよい。目の前に北極星が見えているという星空景観になる。だから、北極星(ニヌファブシ)を目当てにして多様で豊かな伝承が形成される。(北尾 2023a)(北尾 2023b)(北尾 2023c)

(2) プレアデス星団がほぼ天頂を通過する

八重山ではプレアデス星団がほぼ天頂を通過する。これも星名伝承に影響する。

(3) 奄美大島北部を除いて北斗七星のすべての星が周極星にならない

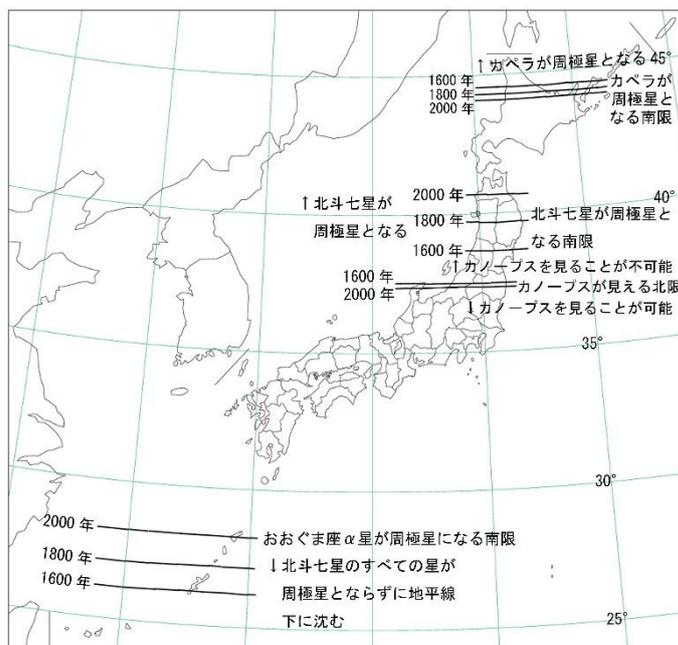
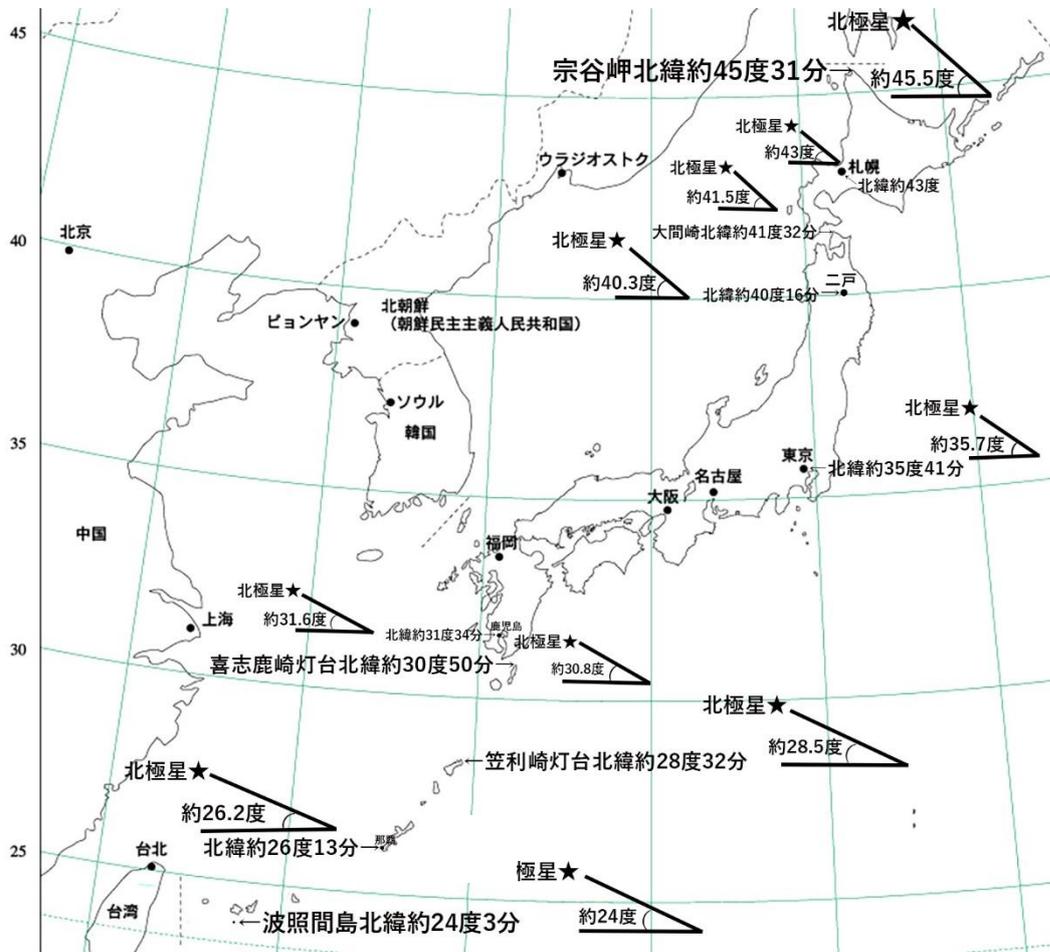
北斗七星のすべての星が奄美大島の北部を除いて周極星にならない。奄美大島の北部では α 星のみ周極星になる。

(4) カノーパスについて多様で豊かな星名伝承形成がされない

瀬戸内海地方、千葉県房総半島では、カノーパスが水平線ぎりぎりに見え、横着星や布良星等の星名形成がされた。しかし、奄美大島で南中高度約9度、那覇市で南中高度約11.2度、波照間島で約13.3度となり、水平線ぎりぎりではなく、横着星と呼ばれるような見え方をしなくなる。

(5) 星、そして暗黒星雲に暮らしを描く

星と星をつないで生活道具を描いた。さらには、波照間島のビタコリブスイのように暗黒星雲(天の川の黒い部分)にウナギを描いた。星の輝かないところも観察し語った。(北尾 2021)



※ ※

本研究では、南西諸島の星名伝承を一地域のものとして捉えるのではなく、日本の星名伝承を論じるにあたって欠かすことのできないものとして位置付ける。星名伝承には、もしかすれば古代から連続した私たちの宇宙観・世界観・自然観が反映されているかもしれない。古代から時間はとぎれず連続しているから。

3 沖縄の星名伝承研究の黎明期

(1) ロシア人言語学者ニコライ・A・ネフスキー

ニコライ・A・ネフスキーは、1922年(大正11年)、1926年(大正15年)、1928年(昭和3年)の3回に渡り宮古島を調査し、数多くの星名、アーク、トーガニを記録した。

i) 星名

ニコライ・A・ネフスキー著、平良市教育委員会編『宮古方言ノート上』(平良市教育委員会、2005)には、次のような星名が掲載されている。(ネフスキー2005a) 各星名の()内は記録地である。なお、カタカナは筆者(北尾)が追記したものである。

- ・ビキラブス bikir'a-busī 男子星ノ意。牽牛星。 biki-r'a:男子 p113(宮古島平良、伊良部島佐良浜)
- ・ブナラブス bunar'a-busī 女子星ノ意。織女星。 bunar'a:女子 p125(宮古島平良、伊良部島佐良浜)
- ・フニブス funi-busī 船星ノ意。北斗星。 p184 (宮古島平良、上地)
- ・ユス°フォーブス ju:zfo:busī 宵の明星 (宮古島平良) [沖縄本島、jwbamm é a:] p314
- ・ナガズウーブス naga 3 u:busī 彗星 p568 (宮古島平良)
- ・ニーヌパブス ni:nupa-busī 「子ノ方星」ノ意。北極星。p617 (宮古島平良、伊良部島佐和田、伊良部島長浜)

『宮古方言ノート下』には次のような星名が記されている。(ネフスキー2005b)

- ・ポーキ°ブス po:k'sī-busī 「箒星」ノ意。彗星。p93 (宮古島平良)
- ・プスガマ pusī-gama 小星 p115 (宮古島平良、伊良部島長浜)
- ・シャーカアガラー sa:ka-agar'a: 暁の明星 p135 (宮古島平良)
- ・ウシムマピキブス usī-mma-p'sīk'sī-busī 「牛馬引星」ノ意。牽牛星。p376 (宮古島上地)
- ・ウフニブス uhu:nibusī 北斗 uhu:ni:大船 p430 (伊良部島佐良浜)
- ・ウブラウサギ upura-usagi 明けの明星 upura:大浦。平良村ノ大字。p481 (宮古島平良)

ii) トーガニ

ニコライ・A・ネフスキーは、1922年8月6日、伊良部島の村役場で伊良部島長浜生まれの垣花(カチヌバナ)氏より次のような即興歌「トーガニ」を記録している。

「なつい ふゆ かわらん にぬばぬ ぶすいがま ユー ふむらだ ていりうり
にぬばぶすいがま ヨー つうあや みやーぎどう ぶすいがまや ながみどう
くらさでい びやーむ ヨー」

(夏も冬も変わらない、子の方の星<北極星>よ。曇らずに照っている、
子の方の星<北極星>よ。あなたを見上げて、星を眺めて、
暮らしたいものだ。)(ネフスキー1998)

「にぬばぬぷす」は「子の方星」という意味になる。即興歌では「にぬばぶすいがま」と唄っている。

「がま」は小さいという意味で2等星の北極星は小さくて愛しいと親しみを込めて「にぬばぶすいがま」(子の方の小星)と呼んでいた。

iii) アーグ

伝承地は不明であるが、ネフスキーは、「むてやーがーらぬあーぐ」を記録している。

「にぬばぶすい びいていつい なり なやぶすい」

(北極星は ひとつで輝く星である。)

「むてやーがーらや みやーくとうなぎ なやびいとう」

(ムチャーガーラは 宮古中で輝く人である。)(ネフスキー1998)

(2) フランス人言語学者シャルル・アグノエルの記録したアガリミチブシ

フランス人言語学者シャルル・アグノエルは、昭和5年(1930年)に沖縄県糸満市を訪れ、次のようにアガリミチブシという星名を記録した。

「ten no kami(天の神)[dieux du ciel]=agari-mitsibusi(hoshi)

東ノ三星[les trois étoiles de l'Est]」(Patick Beillevaire 2010)

アガリは、「上がる」という意味ではなく、「東」という意味である。アガリミチブシはオリオン座の三つ星(オリオン座 δ 、 ε 、 ζ)を意味する。

4. 黎明期に記録された星名伝承の現在

(1) 現在においても伝承されているニコライ・A・ネフスキーの記録した星名と「トーガニ」「アーグ」

i) 星名

約100年前にネフスキーが記録した星名が現在においてどのように伝承されているか、次に記す。「北尾 C」は北尾による現地調査。「北尾 AC」は、北尾によるアンケート調査による記録。

① ブナラブス

『南琉球宮古語多良間方言辞典』に次のように記されており、多良間島においても使用されている。

「ぶなり° ぶす[buna|busɯ][名]織女星。織姫星。」(渡久山他 2020)

② フニブス(北斗)

・宮古郡上野村字宮國(現 宮古島市)

フニブス:漁船や航海中、船員たちが見当にすると云うことから船星と伝えられている。(1983年記録、話者名:平良恵勇氏、当時69歳)(北尾 AC)

・平良市松原(現 宮古島市)

フニブス:舟星(1984年記録、話者:松原の老人クラブ)(北尾 AC)

・宮古郡城辺町保良(現 宮古島市)

フニブス(1984年記録、話者名:下地金吉氏、当時71歳)(北尾AC)

③ ユス°フォーブス(宵の明星)

・宮古郡上野村字宮國(現 宮古島市)

ユス°ファウブス(1983年記録、話者名:平良恵勇氏、当時69歳)(北尾AC)

・平良市松原(現 宮古島市)

ユス°フオブス:ユス°は夕はんの意。フオは食べるの意。夕飯を食べる星。(1984年記録、話者:松原の老人クラブ)(北尾AC)

④ ナガズウーブス

ネフスキーは彗星と記録したが、流星を意味した。

・宮古郡上野村字宮國(現 宮古島市)

ナガズウーブス:長く尾をひいて流れていく。流れ星が出たら有名人が近いうち死ぬと云われている。(1983年記録、話者名:平良恵勇氏、当時69歳)(北尾AC)

⑤ ニヌパブス(北極星)

・宮古郡上野村字宮國(現 宮古島市)

ニノパブス:子方ブス(1983年記録、話者名:平良恵勇氏、当時69歳)(北尾AC)

・平良市松原(現 宮古島市)

ニヌパブス:ニヌパ、子の方(方角)(1984年記録、話者:松原の老人クラブ)(北尾AC)

・宮古郡城辺町保良(現 宮古島市)

ニヌハブス(1984年記録、話者名:下地金吉氏、当時71歳)(北尾AC)

・宮古島市荷川取

ニヌパブス:この辺の人、プス。ニヌパブスめあて船はしらす。父親が石炭を石垣から伊良部までは船で運んだ。そのとき、ニヌパブスめあて。(2019年8月記録、話者生年:昭和11年)(北尾C)

⑥ 宮古島市松原

ニヌハブス(2019年11月記録、話者生年:昭和5年)(北尾C)

⑦ シャーカアガラー(明けの明星)

・宮古郡上野村字宮國(現 宮古島市)

シャーカアガラヤ(1983年記録、話者名:平良恵勇氏、当時69歳)(北尾AC)

⑧ ウシムマピキブス(牽牛)

・宮古郡上野村字宮國(現 宮古島市)

ウシウマピキブス:陰暦7月7日七夕の夜、天の川をへだてている織女星と牽牛星が年に一度川を渡って会うという伝説話がある。(1983年記録、話者名:平良恵勇氏、当時69歳)(北尾AC)

・平良市松原(現 宮古島市)

ウスウマサダティブス:牛と馬を連れている星。「サダティ」とは、「連れる」の意。(1984年記録、話者:松原の老人クラブ)(北尾AC)

⑨ ウブラウサギ

・平良市松原(現 宮古島市)

ウプラウサギ(1984年記録、話者:松原の老人クラブ)(北尾 AC)

現地調査で次のように記録した。

「ウプラウサギ、ゆーあき(夜明け)や。池間島いけばよくわかるのところがうか。夜明け3時か4時に出る」

「ウプラウサギ、東側にアガス°に出る。東のほうに夜明けに見える。相当、光る星。アガス°に出る」
(2019年記録、話者生年:昭和5年、宮古島市松原出身)(北尾 C)

ii) トーガニ

① 伊良部村史に北極星が唄われている「伊良部タオガニ」が掲載されている。

「ナツフユカワラヌ ニノパノポスガマヨ フモリティヤニヤーン ピテツ、ボスガマヨ
ヴァトヨ、バントマイ ピトツボスニヤーンド ツムヌカワリテイヤ アラデンマーンヨ」
(夏冬変わらない 北の星よ(北極星) 曇ることのない 一つ星よ

君と僕は 一つ星の如く 心がわりがあつてなろうか)(伊良部村史編纂委員会 1978)

② 城辺福里の上田長福氏(大正3年生まれ)による「ナツフユ カーラン」に「ニヌパヌプス」が唄われている。以下、『城辺町史 第6巻歌謡編』より引用する。

「ナツフユ カーラン ニヌパヌ プスガマヨー クムラダ ティリー ウい ニヌパヌ プスガマヨー
イー うヴァヤ ミヤギドゥ サカイヤ イカヨー」[ひらがな表記は中舌音]

(夏も 冬も 位置の 変わらない 子の方の 小星よ 曇らず 照り輝いている 子の方の
小星よ あなたを 見上げて カナシャを 見上げて 栄えて いこう)

(城辺町史編纂委員会 2000)

※

※

上記の事例は、ネフスキーの記録と同様、夏も冬も一年中位置が変わらず同じところに輝く北極星を唄っている。そして、次の項では、自分の信じる人、愛する人と重ね合わせて多様性豊かな表現で唄われている。

- ・ネフスキー記録のトーガニ:「あなたを見上げて、星を眺めて、暮らしたいものだ」
- ・伊良部タオガニ:「君と僕は、一つ星の如く心がわりがあつてなろうか」
- ・ナツフユ カーラン:「あなたを見上げて、カナシャ(愛おいしい人)を見上げて、栄えていこう」

iii) アヤゴ(アーク)

『平良市史第七巻資料編5、民俗・歌謡』に、ムティアガラというニヌパブスが唄われた長アーク(長くひっぱってうたう歌)が掲載されている。

「ティン ナームヌヨー ニヌパブスー ピトゥヌ ナームヌヨー ムティアガラヨー」

(天(星)で 名高いのは ヨー(調子を整える語) 北極星 人で名高い者は ムティアガラ(人名))
(平良市史編さん委員会 1987)

(2) シャルル・アグノエルの記録したアガリミチブシへの祈りの現在

アガリミチブシは、糸満の漁師が使用している星名ではない。筆者(北尾)はミチブシ、ミィチィブシを記録した。アガリミチブシと「アガリ」をつけないかと確認すると「つけない」という答えが返ってきた。

金城誠氏は、ミーチブシ、クガニミチブシ、タテーブシを記録している。金城誠氏は、「夏の漁の時、この星の出現や高さから夜が明けるまでの時間を判断している。また、この星はま東から出て、ま西に沈むので洋上の方位を知るあて星としても使える。そのためか、この星を『重んじられている星だからクガニミチブシとよぶ』の話も今回得た」(金城誠 1986)と記している。

漁師にとって生活に必要な星であるが、アガリミチブシの名前が用いられることはなかった。

現在はノロが不在になり行なわれていないが、旧暦5月1日の朔日拝み(チータチウガミ)において次のようにアガリミチブシという名前が用いられていた。

「アガリミチブシ ニーヌファ ウマヌファ ヌ グエーサチ ダヤビル」(東り三星 子の端 午の端の お声がけで あります)

「ミティン サンティン ルーグシン トウヌ グエーサチ ダヤビル」(御天 山巔 竜宮神 との ごあいさつ であります)

「アガリミチブシ ニーヌファ ンマヌファ ヌ グエーサチ ダヤビル」(東三つ星 子の端 午の端のごあいさつ であります)(金城善氏による祈りの記録)(大里字誌編集委員会 2009)

1429年、他魯毎(たるみい)は、中山(ちゅうざん)の尚巴志王(しょう はしおう)の攻撃を受けて、南山王国は滅ぼされた。

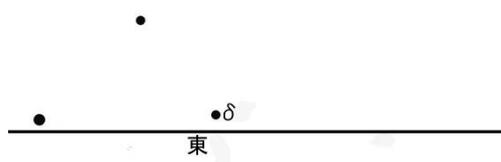
山巔毛には、南山王国最後の王、他魯毎(たるみい)の墓がある。そして、その墓のある山巔毛から見ると、南山城跡の方からのぼるのがアガリミチブシ(オリオン座三つ星)である。これは間違いない事実である。

山巔毛から南側は埋め立てられてしまっているが、かつては海であった。海に向けそびえ、南山城跡からアガリミチブシをのぼる景観のなかでアガリミチブシへの祈りが続いていた。

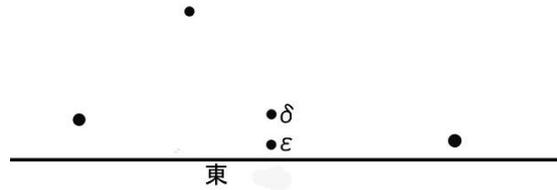
金城善氏は、「筆者は、南山王統の三代の王たちが空に昇っていくのを拝んでいるのではないかと考えるが、アグノエル博士は『東ノ三星』は天の神であると、糸満ノロから聴いている」と記している。(金城善 2014)

アガリミチブシは、 δ 星、 ϵ 星、 ζ 星の順で縦になって出る。最初のにぼる δ 星は初代の王、その次の ϵ 星は二代、 ζ は三代…と、三人の南山王を想像したのであろうか。

①初代がのぼる

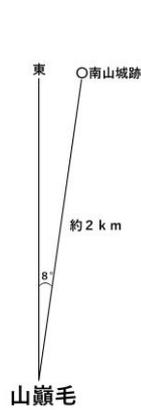


②二代がのぼる



③三代がのぼり南山城の上に輝く

アガリミチブシになった三人の南山王



- δ 初代
 - ε 二代
 - ζ 三代
- アガリミチブシ



山巔毛から南山城跡・オリオン三つ星ののぼる方向

山巔毛から、アガリミチブシ(オリオン座三つ星)はどのように見えるのだろうか。友利健氏によると、山巔毛と南山城跡を結ぶ線を入れた地形図を作成したところ距離は約2キロ東から南の方に約8度にあたる。ちょうどオリオン座ζ星が高度約11度になったとき、山巔毛から南山城跡の方角に輝く。(左図参照 1900年、糸満市の場合)

しかしながら、アガリミチブシへの祈りが行なわれる旧暦5月4日(ユッカヌヒー)にオリオン座三つ星がのぼる様子を見ることができない。太陽の横の方にあるのを拝んだ可能性がある。神役の玉城氏はアガリミチブシでなくミウミサマに祈りを捧げていたが、星ではなくウティン(太陽)であった。右図は、「1429年6月5日午前6時35分」のものであるが、確かにその太陽の右のほうにはオリオン三つ星が存在する。

● 太陽

● ● ● アガリミチブシ



※

※

写真①は卯の端の香炉、②はアガリミチブシの香炉、③は元沖縄タイムス社カメラマンの大城弘明氏が撮影された1986年6月10日のハーレーの取材の写真に写っていたアガリミチブシへの12本の3組の沖縄線香が供えられていた位置である。

アガリミチブシ即ちオリオン座三つ星は東より少し南よりのぼることからアガリミチブシの香炉は①

卯の端の香炉よりも南即ち③付近に設置されるべきである。しかしながら、卯の端の香炉①の北側にアガリミチブシの香炉②が設置された。(写真下)

そこで、神役は本来ならアガリミチブシの祈る場所③に近い①卯の端の香炉をアガリミチブシの香炉と判断して最初に祈りを捧げていた。②(アガリミチブシの香炉)は卯の端の香炉と判断して最後に祈った。



福州の緯度も糸満市の緯度もおよそ北緯26.1度である。福州市—山巔毛—南山城跡は、ほぼ同じ緯度になる。アガリミチブシは東より少し南よりのぼるので若干ずれているが、ほぼ東からのぼる星のなかで最も目立つ。この東西の線は意味があるのであろうか。今後の課題としたい。



5 多良間のニーリに唄われる星名の同定

(1) ユシヤスマヤ、ユツァシキ(秋の四辺形)

『宮古島旧記並史歌集解』には、秋の四辺形、プレアデス、ヒアデス星団とアルデバランでつくるV字形、オリオン三つ星～と順にのぼるのを見て蘇って与那覇勢頭(よなはせど)豊見親(とらゆみや)になって宮古を治めることになったというニーリ(神歌)が掲載されている(稲村 1962)。稲村賢敷氏は、このニーリは、初めは宮古島においても広く歌われていたようであるが、今は多良間島に栗摺りうたとして残っているだけで、平良や下地々方には其の四二節以下だけが僅かに歌はれているに過ぎないと記している。星が順にのぼるのが唄われているのは四七節～であり、宮古島平良、下地地方で僅かに唄われていた個所に含まれる。

「寅の方ゆ見いりば

あがるなゆ、見いりば、

(寅の方則ち東を見ているとの意)

ゆしやすみやーや、

きんたてい、うりが

あとからや、」

稲村賢敷氏は、『ゆしやすみや』はペガス星座(ママ)のこと、『ゆしやす』は島語で屋敷のこと、ペガス星座(ママ)の四つ星を指す、『きんたて』は四隅の柱を立て、家建てすること、即ちペガス星座の四ツ星を見て、その後からはの意」と記している。厳密に言えば、ペガサス座 β α γ アンドロメダ座 α でつくる秋の四辺形を意味する。

多良間島に伝わる星見様の大ヨサシ星が秋の四辺形である。(高城他 1980a)(高城他 1980b)

波照間島の「ひーすくり・じらば」に唄われている「ユツァシキ」も秋の四辺形であり、家建てという共通点がみられる。

「ひーすくり・じらば

その一 ゆつあしキ・じらば

原歌 訳

ゆつあしキてそー 四辺形星を

やーなうーばし 元にして

やーばちくーり 家を造った

あんちよー そうな

ウリヤミョーナチャ 囃子(それは 冥加なことよ)」

(玉城 2000)

多良間のニーリ「ユシヤス」、星見様「大ヨサシ」、波照間「ユツァシキ」は同じグループの星名ではなかろうか。

(2)ンミブス

多良間島のニーリは続く。秋の四辺形の次にのぼる星「んみ星」を歌う。

「んみ星(ぶす)ばあがらし

うりがあとからや」

稲村氏は、『んみ星』はスバル星群(むれ)のこと、『んみ』は群れ(むれ)の意、『八んみ』『十んみ』は八の群、十の群の意」と記している。2022年10月多良間島にて「ム°ミブス」を記録しており、「ンミブス」は現在においても記録できるプレアデス星団(昴)を意味する星名である。秋の四辺形のペガスス座 γ の出からプレアデス星団(おうし座 η)の出まで約3時間13分(1900年、宮古島の場合)である。その時間の経過ののちにのぼる「んみ星」をニーリでは「うりがあとからや」と唄っている。

(3)ムイブス

続いて、プレアデス星団の次にのぼる星について唄われている。

「むい星(ぶす)ばあがらし

うりがあとからや」

稲村氏は、『むい星』は馭者座星群のこと、『むい』は箕(み)のことで馭者座星群の形が箕に似ているから言うのである」と記している。しかしながら、ぎょしゃ座全体で箕に見立てるのは難しく、仮にカペラと ϵ 、 η で作る三角形としても、プレアデス星団の出との間隔が短すぎる。ところが、アルデバランとヒアデス星団でつくるV字形の場合、箕に見立てた箕星が伝承されている。(北尾 2018) また、星見様にも箕(ムイ)星が掲載されており、アルデバランとヒアデス星団でつくるV字形を意味する。(高城他 1980a)(高城他 1980b) プレアデス星団(おうし座 η)の出からアルデバランの出まで約1時間8分を「うりがあとからや」と唄ったと考える。

(4)タタキユミヤ

むい星に続いてのぼる星を次のように唄った。

「たーきゆみや上らし

うりがあとからや」

「たーきゆみや」について、稲村氏は、『たゝきゆみや』星は不明」と記している。唄では「たーきゆみや」、解説では「たゝきゆみや」となっているが、何れにしてもタテイブシ(久米島)、タテーチ、タテイチ(粟国島)、タタスイブスイ(波照間島)と同じグループでオリオン座三つ星を意味する可能性を考えていた。アルデバランの出とオリオン座三つ星の出は約1時間40分の間隔で、「うりがあとからや」の表現にぴったりであると考えた。しかし、宮古群島における伝承事例に出会えなかった。

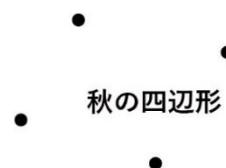
ところが、2022年多良間島塩川にてタタキ°を記録することができた。さらに、次のような文献での記述があることを知った。

・多良間島出身の渡久山春英氏が宮古毎日新聞 2017年4月27日に、「オリオン座の三ツ星は『タタキ°』」

・『南琉球宮古語多良間方言辞典』
の記述

たたき° [tatakɪ][名]オリオン座の三
つ星(渡久山他 2020)

秋の四辺形(ペガサス座γ)がの
ぼってからプレアデス星団、アルデ
バランとヒアデス星団でつくるV字
形、そして、オリオン座三つ星まで
の約 6 時間の星の出を唄ったのだ
った。秋の四辺形からオリオン座三
つ星までを図にした。



○プレアデス星団



●アルデバランとヒアデス星団

(5)ウプラクーラ

最後に出る星はウプラクーラであ
る。

「うぷらくーら、あがらし、
うりがあとからや」

●オリオン座三つ星
東

稲村氏は、『うぷらくーら』又『うぷらうさぎ』は明けの明星のこと、語彙は不明 最後に来る者、しんがりする者にも『うぷらうさぎ』という」と記しており、明けの明星と解釈していた。

ところが、友利健氏との Facebook の Messenger での議論がきっかけとなった。

友利「うぷらくーら」は明けの明星ではない気がしてきました」

北尾「シリウスの可能性？」

友利「そうです。『星見様』に「大うら星・小うら星」がありますが、あれを「おおうらぼし」と読んじゃいけないんですね」

イカ釣りの役星においても、プレアデス星団、アルデバランとヒアデスでつくるV字形、オリオン座三つ星、シリウスという順に東の空からのぼる星を目標にしていた。シリウスならオリオン座三つ星の後に確実にのぼるが、明けの明星は確実ではない。宵の明星のときは見るができない。たまたま木星が明けの明星の代わりに輝いていればよいが、そのような確率は決して高くない。また、時季によってはオリオン座三つ星より前にのぼることもあるだろう。その点、シリウスはオリオン座三つ星の約 1 時間 33 分後に確実にのぼる。また、続いて約 12 分後にプロキオンがのぼる。友利健氏との議論をきっかけにウプラクーラはウプラ=シリウスとクーラ=プロキオンを意味すると考えるにいたった。(友利他 2023)

6 多良間のニーリに唄われる星名ンミブス(プレアデス星団)、タタキ°(オリオン三つ星)の南西諸島の星名

(1)ンミブス(プレアデス星団)の南西諸島の星名

トカラ列島以北はスマル、スバルのグループの星名が分布する。奄美大島、喜界島以南はスマル、スバルのグループの星名は記録できていない。奄美大島、喜界島以南は、群れ星のグループの星名が広く分布している。ニーリに唄われるンミブスも群れ星のグループの星名である。群れ星以外のグループの星名は、奄美大島のナナツブシ、加計呂麻島のナナツレブシ、石垣島のフナープシィ、クナープシィ、ユブス等、一部だけである。

喜舎場永珣氏は、石垣島の大川のフナープシィについて、「語源は組星(クナープシィ)の転である。組合っている星の集団の意」と記している。(喜舎場 1970a)

また、群れ星のグループの星名がプレアデス星団ではなく、「空全体の星」「プレアデス星団以外の一か所にまとまった星列」を意味する伝承事例を記録した。例えば、2020年10月に実施し南城市玉城奥武島の調査においては、「ブリブシ、かたまっている。ブルブシ、ていぬぶりぶしやにぬふあぶしめあて。全部にかたまて。ブルブシ、全部の星」と記録した。

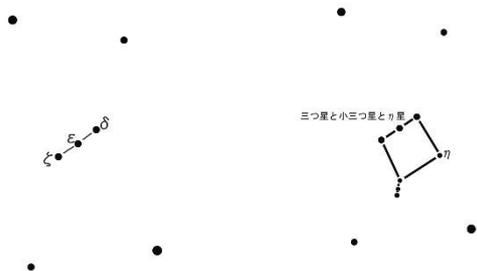


(2) タタキ° (オリオン三つ星)の南西諸島の星名

南西諸島のオリオンの星名は、大きく二つに分けることができる。(下図参照)

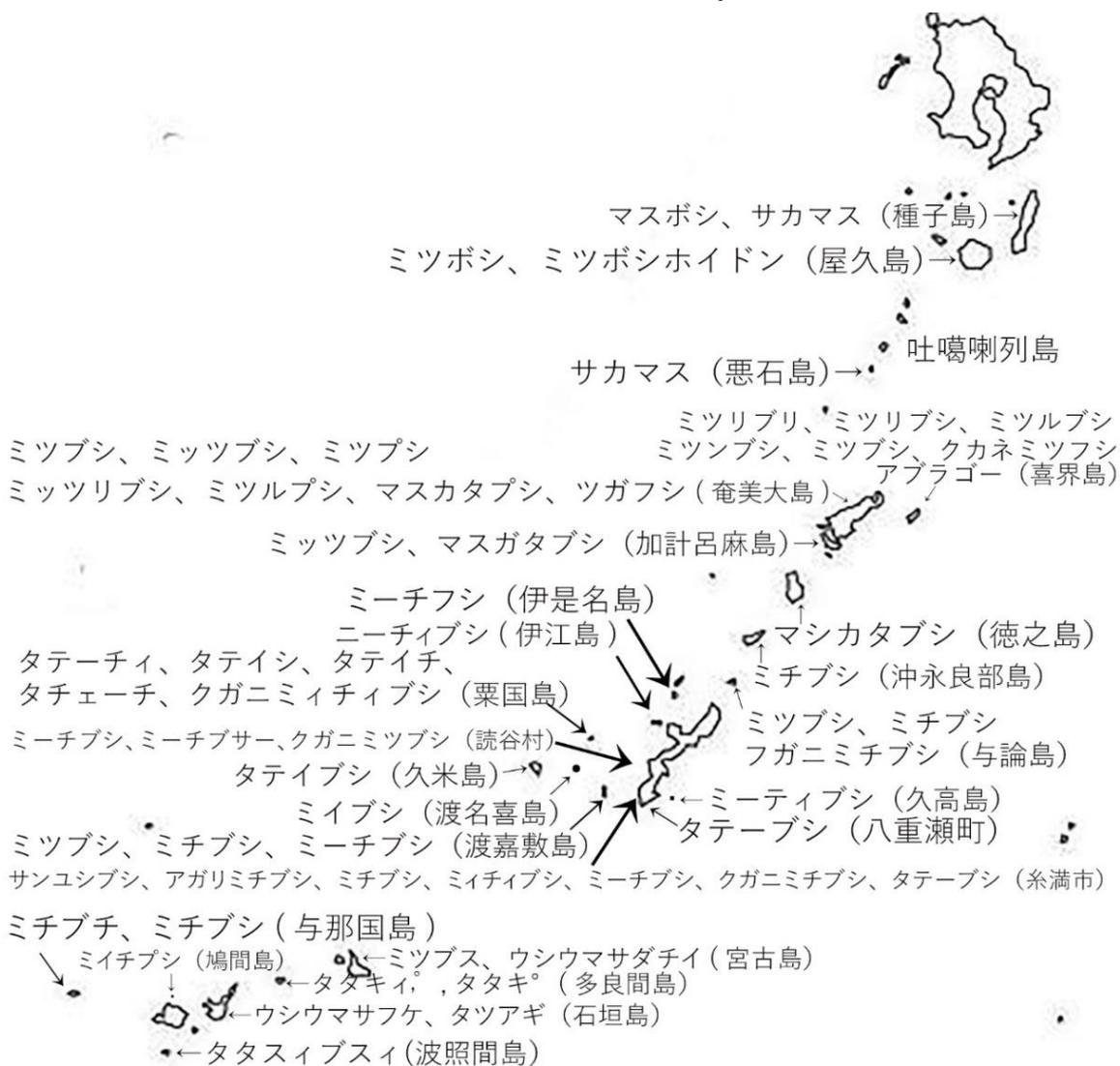
三つ星

三つ星と小三つ星と η 星



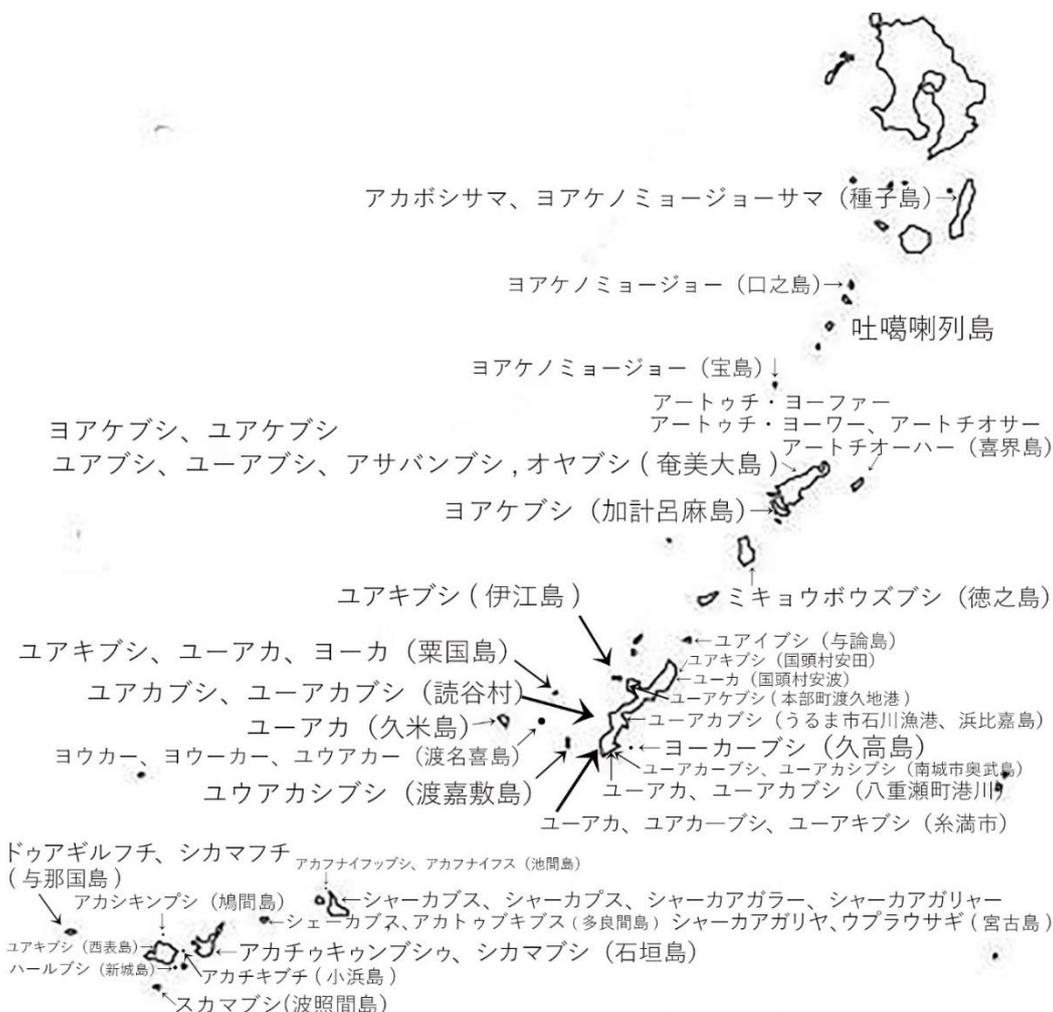
桁星のグループ(三つ星と小三つ星と η 星)の分布は現時点では、種子島から徳之島までであり、沖永良部島以南で記録することができない。沖縄本島及び周辺島嶼部、宮古、八重山での記録は現時点でできていない。

タタキ°は、現時点では多良間島以外では記録されていない。



7 多良間のニーリに唄われる星名ウブラクーラを、稲村賢敷氏はウプラウサギと同様明けの明星と考えたが明けの明星にはウブラクーラは分布していない

明けの明星には、プレアデス星団とちがって、奄美大島、喜界島、徳之島、沖縄本島、宮古群島、八重山、与那国でそれぞれ多様で豊かな星名形成が見られる。地域に根差した星名が誕生した事例として、徳之島の三京坊主星、宮古島のウプラウサギがある。ロシア人言語学者ニコライ・A・ネフスキーが1922年(大正11年)、1926年(大正15年)、1928年(昭和3年)の3回に渡り宮古群島を調査し、宮古島平良にて「upura-usagi 明けの明星 upura:大浦。平良村ノ大字」と記録した。(ネフスキー2005b) また、2019年、宮古島市松原で「ウプラウサギ ゆーあき(夜明け)や。池間島いけばよくわかるのとちがうか。夜明け3時か4時に出る」と聞くことができた。いまでも語られている星名である。しかし、ウブラクーラを明けの明星としている事例はなかった。



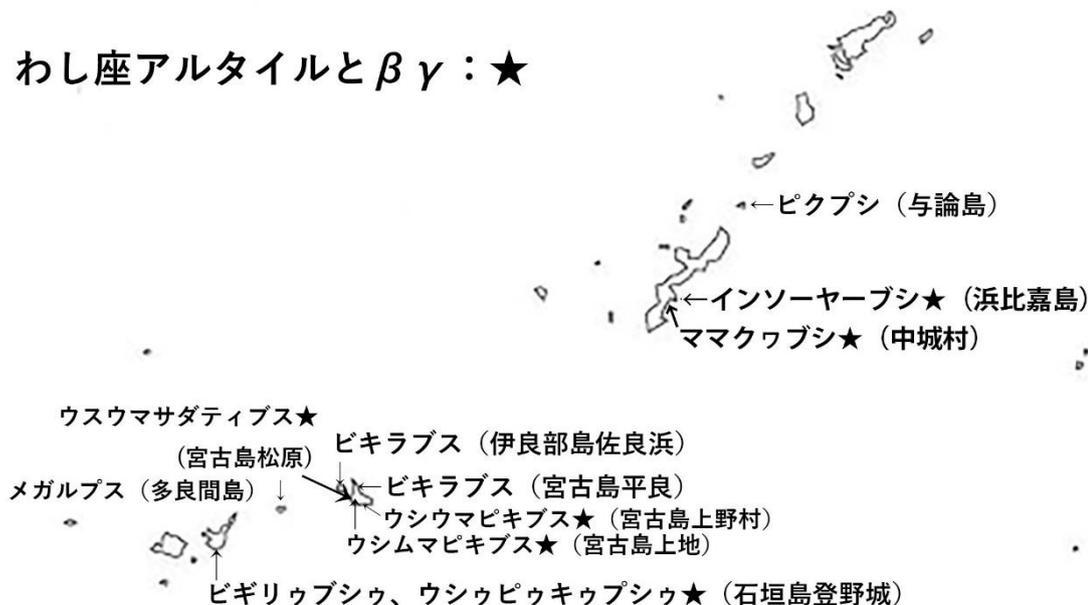
8 わし座アルタイル、アルタイルとβ γの星名

●インソーヤーブシ(犬伴星)(わし座アルタイルとβ γ)

沖縄県うるま市浜比嘉島浜に伝えられている。インは「犬」、ソーヤは「連れていく」という意味。インソーヤーブシ(わし座β、アルタイル、γ)の延長線上にウフブシ(ベガ)があり、この間に天の河が横たわっているので、これらの関係を浜比嘉島浜では、犬をひきつれたサトゥヌシ(土族の位階)がチュラアングワー(美女星、ベガ)に会いに行こうとしているところと見立てた。β、γは犬だが、γの犬のほうが度胸があって主人(アルタイル)よりも先に大河(天の河)に入ったと言われている。漁師、二人より聞いた星名である。(金城 1984)

九州に伝えられている犬飼星が沖縄にインソーヤーブシとして伝えられている。犬飼星は、平安時代中期の辞書である源順著『倭名類聚抄 天部第一』に、「牽牛 和名比古保之又以奴加比保之」と記されている古い星名である。(比古保之:ひこぼし、以奴加比保之:いぬかいぼし)

わし座アルタイルとβ γ:★



星名分布図は、下記により作成した。

(岩倉 1941)(奥武方言編集委員会 2019)(金城誠 1984)(金城誠 1986)、(渡久山他 2020)(ネフスキー2005b)、(野尻 1973)、(宮城 2003)、(松山 1984)、(北尾 C)(北尾 AC)

9 おわりに—今後の課題

星は、暮らしの様々な場面とかかわりがあった。生業、信仰、年中行事それぞれに多様で豊かなかかわりがあった。そして、星が語られ、唄われた。それらは、古代から連続した営みであった。いま、シニグや綱引きと星とのかかわりについて調査を進めている。様々な切り口から星と人とのかわりを考えていくことを今後の課題としたい。

また、奄美・喜界島以南にはスマル・スバルのグループの星名は分布しない。しかし、宮古島に

スマルという言葉は現在においても使われている。星名としてではなく、束ねる意に使われている。

『宮古島旧記並史歌集解』に掲載されている「金志川金盛があやご」に「ゆばらかぎ、すまりよ」とある。稲村氏は、「『すまり』又『すまる』は日本の古語である。くゝる事、たばねる事、八尺瓊曲玉やきかほの事を五百箇御統の玉(いをつみすまるの玉)とも言、これは五百箇の多くの玉を一本の糸に貫いてある玉の意である」「この『みすまる』は此の宮古島語の『すまる』と同義で種々多様の物を一つに束ねる意である」「『すまる』は現在でも束ねる意に使用されている」と記している。(稲村 1962) 現在も宮古島では「すまる」を束ねる意に使われているとあるが、星名は「すまる」でなく、ンミブス(群れ星)であった。宮古島の「すまる」という言葉が星を意味しないでンミブスということは、「すまる」が星を意味するようになったのは日琉祖語の分岐以降と考えてよいかどうか。これも今後の課題としたい。

拙著『日本の星名事典』では古事記に登場する古代の玉飾り「美須麻流之珠(みすまるのたま)」を星のスマルとすることに対する疑問を悩みながら書いた(北尾 2018)。宮古島で星の名前として「すまる」にならなかったことからすると、古事記の時代の「みすまる」は星を意味していたと安易に断定してはいけないことになる。

これからも、沖縄・奄美の星名を調査研究を通して、日本列島全体の星について考えていきたい。

※

※

調査にあたって、波照間島については島村修氏、新城勝氏、与那国島については、田原伊明氏、上地艶子氏、宮古島については宮川耕次氏、多良間島については多良間市教育委員会の桃原薫氏の貴重なアドバイスをいただいた。2019年の宮古島、与那国島等の調査に同行いただいた宮地竹史氏、2020年の波照間島等の調査に同行いただいた通事安夫氏、与論島の調査に同行いただいた澤田幸輝氏、沖縄本島、粟国島、久高島、浜比嘉島等の調査に同行いただいた友利健氏、福里美奈子氏、そして、星名伝承を語ってくださった話者のひとりひとりに感謝の意を表します。

引用文献

岩倉 1941…岩倉市郎『喜界島方言集』中央公論社、1941、pp.250-251。

稲村 1962…稲村賢敷『宮古島旧記並史歌集解』琉球文教図書、1962、pp.393-401。pp.431-432。

喜舎場 1970a…喜舎場永珣『八重山古謡 上巻』沖縄タイムス社、1970、p.51。

野尻 1973…野尻抱影『日本星名辞典』東京堂出版、1973、pp.184-188。

伊良部村史編纂委員会 1978…伊良部村史編纂委員会『伊良部村史』伊良部村役場、1978、p.1481。

高城他 1980a…高城隆、星加弘文『『星見様』の研究(上)』『沖縄文化 53』沖縄文化協会、pp.41-52。

高城他 1980b…高城隆、星加弘文『『星見様』の研究(下)』『沖縄文化 54』沖縄文化協会、pp.71-93。

松山 1984…徳之島町の松山光秀氏から1984年に提供を受けた資料

金城誠 1984…金城誠「浜・比嘉で拾った星の方言名」『やちむん第8号』やちむん会、1984、

- pp.62-69。
- 金城誠 1986…金城誠「星の方言名-糸満市字糸満-」『やちむん第9号』やちむん会、1986、
pp.47-53。
- 平良市史編さん委員会 1987…平良市史編さん委員会『平良市史第七巻資料編5 民俗・歌謡』平
良市教育委員会、1987、p.620。
- ネフスキー 1998…ニコライ・A・ネフスキー『宮古のフォークロア』砂子屋書房、1998、pp.190-191。
pp.272-273。
- 玉城 2000…玉城功一「ひーすくり・じらば」竹富町古謡編集委員会『竹富町古謡集 第三集』竹富
町教育委員会、2000、p.306。
- 城辺町史編纂委員会 2000…城辺町史編纂委員会『城辺町史 第6巻歌謡編』2000、p.166。
- 宮城 2003…宮城信男『石垣方言辞典 本文編』沖縄タイムス社、2003、p.16。
- ネフスキー 2005a…ニコライ・A・ネフスキー著、平良市教育委員会編『宮古方言ノート上』、平良市
教育委員会、2005、p.113、p.125、p.184、p.314、p.568、p.617。
- ネフスキー 2005b…ニコライ・A・ネフスキー著、平良市教育委員会編『宮古方言ノート下』、平良市
教育委員会、2005、p.93、p.115、p.135、p.376、p.430、p.481。
- 大里字誌編集委員会 2009…大里字誌編集委員会『大里字誌』糸満市大里公民館、pp.681-687。
- Patick Beillevai 2010…Patick Beillevaire, OKINAWA1930 NOTES EHENOGRAPHIQUES DE
GHARLES HAGUENAUER, p.69。
- 金城善 2014…金城善「フランス人東洋学者シャルル・アグノエルが訪ねた昭和五年の糸満町」
『沖縄民俗研究第33号』沖縄民俗学会、2014、pp.25-49。
- 北尾 2018…北尾浩一『日本の星名事典』原書房、2018、pp.17-18。p.92。
- 奥武方言編集委員会 2019…奥武方言編集委員会『奥武方言』奥武区自治会、2019、pp.237-247。
- 渡久山他 2020…渡久山春英、セリック・ケナン『南琉球宮古語多良間方言辞典』国立国語研究所、
2020、p.36。p.250。
- 北尾 2021…北尾浩一「天文民俗学試論 184」『天界 2021年3月』東亜天文学会、2021、
pp.81-83。
- 友利他 2023…友利健、北尾浩一「多良間島のニーリに登場するウブラクーラについて」『天界 2023
年5月』東亜天文学会、2023、pp.168-171。
- 北尾 2023a…北尾浩一「天文民俗学試論 189」『天界 2023年8月』東亜天文学会、2023、
pp.291-292。
- 北尾 2023b…北尾浩一「天文民俗学試論 190」『天界 2023年9月』東亜天文学会、2023、
pp.329-330。
- 北尾 2023c…北尾浩一「天文民俗学試論 191」『天界 2023年11月』東亜天文学会、2023、
pp.407-408。
- 北尾 C…北尾による現地調査
北尾 AC…北尾によるアンケート調査